

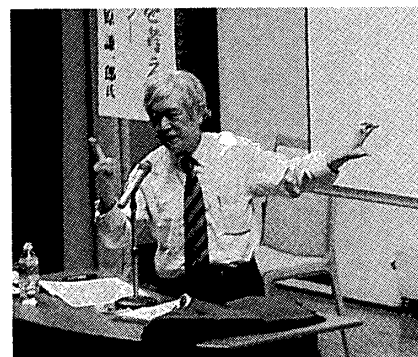
「平成14年度高岡短期大学特別公開講演会 講演録」

演 題：地方の視点で「文化の世紀」を考える

－倉敷から高岡へのメッセージ－

講 師：大原 謙一郎*

講演日：平成14年12月3日



(前 書)

この講演録が活字になるにあたり、この機会を作ってくれた高岡短期大学前学長の故蠟山昌一君に、謹んで哀悼の意を表したいと思います。講演の中でも触れましたが、蠟山君は、学生時代から最も深く尊敬していた大切な友人でした。その蠟山君が、この講演の後半年を経ずして帰らぬ人となってしまったことは痛恨のきわみであり、今も悔しくて、悲しくてなりません。

ただ、私にとって嬉しかったのは、蠟山君に別れを告げるため高岡を訪れたとき、大学関係者だけでなく、行政の方からも、経済界の方からも、タクシーの運転手さんやすし屋のお兄さんからも、あらゆる方から蠟山君に対する温かい思いを聞かせていただいたことでした。蠟山君の高岡に寄せる思いを知っていた友人の一人として、涙が出るほど嬉しいことでした。

講演録に入る前に、蠟山昌一君のご冥福を心からお祈り申し上げたいと思います。

皆さん、こんばんは。倉敷からまいりました大原でございます。今回は、蠟山学長からぜひ来いというお誘いを受けて、本当にうれしく勇躍駆けつけた幸いです。私が彼に初めて会ったのは大学の3年生のときで、大学にもどえらいやつがいるということをそのときにしみじみと思ひまして、今でも非常に尊敬している仲間です。学生というのは人を尊敬するのはあまり得意でないのですが、会ったときに、あのスケールの大きさ、エネルギーのすごさ、勉強のものすごさに、いきなりがーんとやられた感じで、こいつにはとてもかなわないということで最初からシャッポを脱ぎまして、今でも脱ぎっぱなしという関係が続いています。そういう蠟山君から一度来ないかと言われたというのは、蠟山は案外私のことを買ってくれているのかなという意味でもとてもうれしかったです。

また、一昨年児島虎次郎の展覧会を高岡でさせていただきました。それ以来高岡にすごく親しみ深い気持ちを持っていますので、そういう気持ちからもうれしく思って来たわけです。

それに、今、地方どうしがいろいろな意味でメッセージを交換することは日本のためにとっても大事なことだと思います。これは、今日のこれからの話の一つの主題になってきます。そういう意味で、私たちが世界に対して出そうと思っているメッセージを、高岡の皆さんにもぜひ受けとめていただきたいと思ひますし、また本当に短い時間ですが、ここにいる間に高岡からのメッセージを倉敷に持って帰りたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひします。

レジュメの次に写真が付いていますが、こういうものが付いているとどうも気になってしかた

がないでしょうから、これは何の写真かということだけまず言います。真ん中にあるのが大原美術館です。左上にあるのが2階の展示室です。ここがいわゆる泰西名画の展示室で、一段高く出ているのがエル・グレコです。1600年早々くらいに描かれたものです。その隣がトゥールーズ・ロートレックです。いわゆる泰西名画の一番のスタープレイヤーがここにそろっています。

その隣の丸い写真は窓ですが、この展示室の一番奥にこの窓があります。この窓の向こうの風景をごらんいただけますか。瓦屋根が見えます。これは今から200年前に建った商人の家です。そして、その向こうの山の中腹に古い真言宗のお寺があるのが見えますか。たぶん見えないうね。

なぜこういうものを2つ並べたかという、私たちの美術館の本館二階展示室、いわゆる泰西名画のスタープレイヤーがたくさん並んでいる部屋から丸窓をのぞいていただくと、そこにあるのは日本の原風景なのです。200年前、江戸時代の瓦職人が1枚1枚置いていった瓦がそのままそこにあります。その少し向こうの山の中腹には真言宗の古いお寺ですが、これが開かれたのは九百何十年か、平安時代だといわれています。建物はそれほど古くありません。そのあと燃やされたり、いろいろ動乱があったのです。たぶん全国各地にそういうものはいろいろあると思いますし、この高岡にもあるに違いないと思いますが、寺の門のわきの小さな木戸には槍で突いたあとの傷が残っています。これは明治維新のときに奇兵隊の連中がこじ開けようとしたところだと言われています。そういうものが残っていますが、動乱の中で古い建物はもうなく、たぶん江戸時代の建物だと思います。けれども、そういう古刹が見えます。瓦屋根の向こうに丘があって、古いお寺があるという、ある意味で日本の原風景がそこにあります。それが日本人の心のたたずまいに一番しっくりくるものだということを私たちはとても大事にしています。そういう風景が窓の向こうにあって、振り返ればそこには世界の絵があるという姿を私たちは大事にしていることを、今日これからいろいろとお話しさせていただきたいと思っています。

下の2つの左側は運河です。この両側に、江戸時代の町並みがそのまま残っています。ときどき、これは何かお化粧した観光地のように思われますし、実際そういうこともあることはまちがないのです。けれども、ここは江戸時代の生活のにおいがこもった場でした。この運河を通して、お米が瀬戸内海を行ったり来たりしていました。北前船はここまでは上がってこなかったのですが。そのような生きて使われていた運河の横に江戸時代の町並みがそのまま保存されている、そういう姿を私たちは一生懸命大事にしています。そのような観光客向けにお化粧したところの内側では、路地裏で、あるいは造り酒屋の酒蔵で、商人の家の土間で、いろいろおもしろいことが起こっている。これが大事だということです。これは地方どうしよくわかりますね。たぶんここ高岡でもそうだろうと思います。

たぶんこの方にもよくわかっていただけたらと思います、右の絵を用意しました。屏風祭りです。ご当地でもやっておいでですね。お祭りのときに、古い商家の格子戸を開けて、そこに屏風を飾って、皆で楽しもう。大事なのは皆で楽しもうということだと思います。観光客のためにやるのではなくて、自分たちが楽しむためにこういうことをやっています。それを、たまたま外からおみえになった方も楽しんでいただけます。これが日本の心を大事にしている町というものです。屏風祭りのときにもこれをやってくれる町屋の町衆が、「これはおもしろいから、めいっ子、おいっ子みんな呼んできて一緒にやるよ」と言ってくれています。来てくれるお客さんも近所のお客さんが多い。「お前のところにこんなのがあったの」というような話を道でしています。そういう姿がとても大事だと思います。

町並みの保存というのは、ある意味で観光客に見ていただく部分もあるのですが、その裏にそのような歴史を楽しんでいる生活があることを見ていただくために、この図版を用意しました。この5つの絵を頭に置いていただいて、前のページの話に入らせていただきます。

倉敷人の自己紹介

—倉敷とは何だ、そこに住む倉敷人とはそもそも何者だ—

まず「倉敷人の自己紹介」から始まってしまうのです。ものすごく自意識の強いやつだと思いかもかもしれませんが、実際、自意識が強いのです（笑）。市民というのは自意識が強いのです。先程、倉敷も歴史のある町だという話がありました。隣の岡山市は備前池田32万5000石、「どうだ、偉いだろう」と言っているのですが、ここに来たらたった32万石ということになってしまうので（笑）、ちょっとつらいのです。本当は32万石だってそこそこ偉いのですが、100万石にはとてもかないません。そういうお殿様がいたところですよ。ここに来てあっと思ったのは、お城ができて400年なのだそうなんですが、岡山城も築城400年ということで一生懸命お祝いしています。同じようなところが日本中にあるのだなと感じました。

ただ、私の倉敷は天領ですから、お殿様がいないのです。代官さんしかいません。例えば、小堀遠州という庭づくりの名人で、お茶人としても高名な風流人が代官でやってきたという話もあるようです。代官さんは家臣群を持っていませんから、警察力は案外弱いのです。江戸時代に警察力が弱かったらどういうことが起こるかということ、一揆や内乱が起こります。これを起こさないようにするためにはどうしたらいいか。住民に自治を認めるしかないということで、元禄のころに備中天領倉敷では村役人などを選挙する制度ができています。それとほぼ時を同じくして、その前のアンシャンレジーム、いわゆる地主資本、昔から土地を支配していた古禄13軒といいますが、そういうファミリーの支配を周りから入ってきた商人たちがひっくり返す騒動を起こしています。古禄、新禄の抗争などといっています。そして、そういう地主階級に代わって商業資本が支配権を握ってしまう。そのバックグラウンドとして民主主義の発達があった。それと同時にこういう商人たちが義倉という社会福祉の制度をつくります。

そういうことが元禄時代から、つまり1800年代の初めころからずっと続いて明治維新を迎えるわけです。そういう意味では天領であった倉敷では明治以降の社会に対する準備がずっとできていた。これは倉敷だけではなく、日本の方々でできていたのはものすごく大事なことだと思います。

そういうものがたぶん明治以降、倉敷紡績という会社をつくる时候にも生きます。何も私の孝四郎というひいじいさんだけがつくったわけではありません。地元にいる若者たちが何か産業を興さなければいけないということで動き出してつくり上げたものです。おもしろいのは、そのときに担ぎ上げた大原孝四郎という人物は私のひいじいさんですが、旧体制の庄屋です。つまり江戸時代のアンシャンレジームのトップにあった人を、若者たちが担いで明治維新の立役者にしてしまった。そのようなことがずっと日本の方々で起こっているのです。その1つの例が倉敷でもあったということです。そのようなバックグラウンドを持っている倉敷市民ですから、市民意識が強く、自意識も強いのですから、私はこういう人ですというところから話を始めてしまうのですが、倉敷というのはそういう町です。それを一つ頭に入れていただいて、次に入ります。

文化の世紀が始まった

—文化は風雅の世界に遊ぶだけでなく、汗を流して働くことが求められる—

「文化の世紀が始まった」副題として「文化は風雅の世界に遊ぶだけでなく、汗を流して働くことが求められる」、これが私たちの2002年から2003年になろうとしている今時点の時代認識というか、世界への認識だと思います。2年前は少し違いました。2年前は「文化の世紀が来る」。これは喧騒の物質文明の20世紀から、もっとゆったりした穏やかな、「風雅の世界に遊ぶ」と書いていますが、文化を人類が楽しむ世紀がもしかしたら始まるかもしれないと私たち多くの人が思っていたと思います。実際始まってみたら、そんなものではないことがわかってしまったらうと思います。21世紀はたぶんそれほど平穏な世紀ではありません。9・11(2001年9月11日米国同時多発テロ)のことだけを言っているのではなくて、その背後にあるいろいろなものに、私たちは気づきをおさなくてはいけないのでしょうか。今日はそういうことが主題ではありませんから詳しくは言いませんが、そういう新しい時代、世紀に文化はかなり決定的な役割を果たさなければいけない。

私が勝手に言っているわけではありません。20世紀最後の年の2000年8月、9・11が起こる1年あまり前にこういうことがありました。コロラド州のロッキー山脈の中にアスペンというスキー場があるのをご存じの方がおいでだと思います。そこにアスペン研究所という人文科学的な見方から世界を見ている研究所がありまして、案外影響力の強いところです。この研究所の50周年で、3泊4日のシンポジウムがありました。その主題は何かというと、グローバリゼーションです。いわゆるグローバリズムがどれくらい人類に明るい未来を開くかという話ではなくて、もちろんそういう話をする人もいましたが、そうではなくて、これが進むといろいろ大きな問題が起こってくるという立場の人もたくさんいました。例えばアイルランド共和国の昔の大統領メアリー・ロビンソンさんという女性の方、今国連の高等弁務官をやっていますが、非常に強くアメリカのあり方を批判していました。もう片一方には、例えばアメリカの軍需産業などの代表の方もいましたし、ジョセフ・ナイというアメリカの国防のブレーンもいました。非常に生臭い、軍備をどうするか、外交をどうするか、平和とは何であるか、法の支配とは何であるか、経済進出は何だ、世界の経済を1つのルールにまとめるためにはどうしたらいいか、うんぬんかんぬん。もちろんミサイル防衛網はどうか、宗教の問題、いろいろありました。

けれども、ここで申し上げたいのは、そういう生臭い外交問題・軍事問題・経済問題を議論する3日間のシンポジウムの一番初めのセッションが宗教だったことです。9・11以前ですよ。そして、最初に壇上に登ったのが、キリスト教ではカトリック、プロテスタント、ヒンズー、儒教、もちろん仏教、そういう人たちが壇上に登って、宗教者はこれからの世界に何ができるかということを議論しました。それから何か生臭い話がたくさんあって、最後は文化のセッションでした。ここで壇上に登ったのは、ハーバード大学の美学の先生、スカリーさんというすてきな女性の方や、以前のワシントンのナショナルギャラリーの館長をしていたブラウンさんという方、美術館の経営者です。そういう方が壇上に登って、美しいものに共感する心を世界に広げようとする博物館活動・美術館活動が、これからの世界にどんな意味があるかということを非常に熱心に討議されました。

ご承知のとおり、アメリカというのは20世紀の物質文明の一番嫌らしいところを実現してしまった国であるにもかかわらず、そして今のアメリカに対して皆さんいろいろなことをお考えになると思います。ああいうことをやっていて世界はどうなるのだとお考えの方もかなりおいでか

もしれません。そういうアメリカの中に、世界の問題、グローバリゼーションの問題を考えると、まず宗教を考えなければいけない、最後には文化で締めくくらなければいけないという考え方をする人もいます。これがあの国の一つの底力ですね。非常に健全な部分を持っていることをこういうところからも感じさせられます。そのような意識を持っているということをまずご紹介しておきたいと思います。

この世紀に私たちが直面する問題というのは、そんな生易しくないことはもうすでにわかっています。9月11日に文明の衝突が起こったわけですが、そう簡単に割り切っていいかどうかはともかくとして、それ以前から地球環境の問題、人口爆発の問題、世界的規模で広がる貧富の差の問題といったものに私たちは答えを見いださないといけないことは多くの人気づいていたことでした。1992年にリオデジャネイロで地球サミットが行われました。そこで議論されたのは地球温暖化ガスの問題や、地球の環境を守るという問題で、アジェンダ21が採択されたことは皆さんご存じですね。アジェンダ21というのは、いわば地球環境を守るための憲法のようなものです。こういうものに基づいて温暖化ガスをどうするかについていろいろ議論したのが京都議定書で、これをめぐって世界はまだすったもんだしています。

そのような中からどういうことが教訓として得られたか。今までのような外交交渉ですと、例えば日本の外務大臣が行ったら、いつごろ解散があるだろうとか、この次の選挙はどうなるだろうかということに気がしながらいろいろな利害調整をやってくる。もちろんアメリカもそうです。世界中がそうやってどの国の軍隊は強いとか弱いとかいうことを考えながらやる外交交渉には限界があることがだんだんわかってきました。リオデジャネイロの地球サミットのときに、NGOがすごく活躍したというのはそういうことです。外交官には任せておけないと。ついこの間のヨハネスブルクのサミットはどういう問題意識であったかということ、環境問題というのは森や炭酸ガスの問題などだけでなく、もっと広く社会的な問題を考えなければいけない。このことを非常に強く言っておられるのが国連のアナン事務総長です。そういうことを考えて、より広く問題をとらえようと開かれた会議であったはずですが、そういう会議が開かれたことは非常に良かったとは思いますが、結果は必ずしも満足するものではなかったと思います。

今日はそういうことを申し上げるのが目的ではないわけですが、そういうことを見ていると、何がわかってくるかということ、これからの世界を救うのは外交官でもなければ兵士・兵隊たちでも政治家でもないだろうと。これから世界が何を交渉して行かねばならないかということ、地球環境を守るためにお互いに何を犠牲にするかということです。外交交渉の中でお互い何を勝ちとるかを交渉するときには楽です。何を犠牲にするか。あの国よりうちの国の方がたくさん犠牲になっているということに耐えられる国というのは非常に少ない。アメリカだって、今批准しないのはそういうことでしょう。ヨーロッパよりアメリカの方が損するから批准しない。京都議定書の話です。

そういう問題を5年、10年、20年かけて解決しようと思ったら、もっと深いところで民族どうし、国民どうしが理解し合わないと、解決が出てくる素地がつかれないということを、今いろいろな人が気づいています。先程のアспенで、最初は宗教から始まり、すべての締めくくりは文化ですというお膳立てをした人たちも、たぶんそのことに気がついていたのだと思います。社会科学的、経済学的、法律学的、軍事学的、地政学的にいくらグローバリゼーションの問題を論じて、心の問題、文化の問題をなおざりにしていたのでは今の問題は解決しないことをアメリカのアспенは気がついている。私たちもだんだん気がつき始めていると思います。

文化は汗を流して働かなければいけない、風雅の世界に遊んでいるわけにはいかないというのはそういう意味です。この地球を救うためというのは大げさな話で、地球なんて人間がどんなことをやろうが暴れようが何をしようがつぶれはしません。ただ、この地球の上に人類が生存することが許されるかどうかという問題です。人類がなんとかこの地球の上に生存を許されようとしたら、お互いの文化的なつながりをもっと自覚しないと、今のような外交的なつながりだけを自覚したのではだめだろうと思います。そういう意味で、文化は汗を流さなければいけない。

もしかして、今の話はどこか別世界の話とお感じの方がおいでかもしれません。確かにある意味ではそうです。そういう地球の上で人類が平和であるためのベストな回答を「じゃ、お前、出してみろ」と言われたら、私には出せませんし、それを出すのはたぶん人類最高の英知を持った人たち、蠟山君のような人たちが出してくれる答えを私たちは受け入れることになるだろうと思います。

ここで私たち一般市民がぜひ考えておかなければいけないのは、こういう地球の非常に困難な状況を迎えて、人類が最低最悪の答えを出してしまわないための歯止めは、ある意味で私たち一般市民の文化的底力だろうということです。これは皆さんと一緒に私自身も考えていかなければいけないことだと思います。地球上に使える資源が少なくなってくる。水もなくなってくる。人口爆発を養うだけの食糧はどうするのだ。それを支える空気や水、環境はどうなってきたか。地球の平均気温がじりじり上がってきた。炭酸ガスがたくさん増えすぎた。こういうことに対して、人類はもしかしたら最低最悪の答えを出してしまうかもしれない。

ほんの50年前にそういう例があったわけです。この地球の上から劣等民族であるユダヤ民族を抹殺し、優等民族であるアーリア人、ゲルマン民族が生き残るべきであるという結論を出した人間がいました。よその国のことだから、よその国の人だからと、私たちは言っていられないのです。私たちと同じ人間がそういう結論を出して、しかもそれを実行に着手してしまったことがほんの50年前にありました。ああいうホロコーストのようなことが、これから21世紀に直面するいろいろな問題を解決するための解決として出てこないようにするのは、私たち市民一人一人の文化的底力しかないと思っています。すでになんて怪しい、危ない兆候は現れていますから、私たちが本当に心をしっかり持って考えておかなければいけないというのが、2番目の、文化の世紀が始まったけれども、文化は汗を流して働かなければいけないということの意味です。

また、私たち市民自身が思想的にも哲学的にも文化的にも美学的にもある意味で宗教的にも武装していかなければいけない。そのときに、地方は何なのだろうということを考えるのが3番目です。

世界と日本と地方について

—今の世界に、日本の地方が語りかけるものを大切にしたい—

私たちの国の風格のようなものが本当に失われてしまったと感じておいでの方はかなり多いのではないかと思います。私は決して狭苦しい愛国者ではありませんし、いわゆるナショナリズムをこれから国の中に巻き起こそうという気持ちを持っている人間でもありません。けれども、私たちが私たちの歴史の歩みの中で築き上げてきたものはやはり大事にしたいという気持ちはとても強く持っています。美術館のような仕事をしていても、私たちの国の2000年の歴史は、日本の国は決してそんな風格のない国ではないということをたぶん示しているだろうと思います。それぞれの日本の地域・地方にいろいろな物語が埋まっているのです。このことが今、だんだん明

らかになっていると思います。

そういう各地の物語は一応置いておくにしても、私たちが学校で習った奈良、近畿地方、東京、江戸、鎌倉、室町、そういうところを中心とした日本の歴史の物語の中だけでも、ものすごく大変なロマンがこもっているでしょう。縄文時代までさかのぼらなくても、もちろんさかのぼってもいいのですが、今一步奈良に行ってごらんになったら、あの興福寺の宝物殿に白鳳・天平の時代から鎌倉時代、運慶・湛慶たんけいの時代まで、日本人が作り出したものがしっかり残っています。あるいは東大寺を歩いてごらんになったら、京都に行ってみたらどうでしょう。私が知っているこの一番近くは、たぶん湖北の渡岸寺などの十一面観音だろうと思います。こちらのことをあまり存じ上げなくて申し訳ないのですが、日本各地、全国津々浦々に日本人が生み出したいろいろなものがしっかり残っています。

そのような彫刻や美術だけではないですね。文学についてはどうだろうか。今でも私たちの心のよりどころになっている万葉の世界をつくり出した人たち、あるいは平安時代、あの源氏物語を生み、あるいは古今・新古今を生んだ人たち。いろいろなものをつくり出した人たちが私たちの歴史の中にあることを、20世紀の最後の50年ぐらい、特に最後の10年ぐらい、私たちは忘れすぎているのではないだろうか。

私たち日本の文化遺産とはどんなものだったかということはいろいろなところに出ていることです。しかもうっかりまちがえると、それが変に偏った主張に結びつきかねないですから、ここではたくさんは言いませんが、そういった歴史のつながりが日本の地方にしっかり残っているということを倉敷も大事にしたいと思ひますし、高岡でもぜひ大事にしたいと思っています。

先程、江戸時代の庄屋、つまりアンシャンレジームのトップだった人間が明治以降担がれて新しい産業の旗手になったのが倉敷であった、それで出来上がったのが倉敷紡績だったということをおし上げましたが、全国津々浦々そう珍しくないことなのです。東京は違います。東京では何が起こったかという、錦の御旗を掲げた薩摩や長州の人がわんわんやってきて、それまでの公方さんとか何とか、皆ひっくり返して、追い出して、今までのものは全部だめだ、これからは新しい時代だといって、新しい世界をつくった。これはこれですばらしいことだったのですが、地方は地方でしっかり歴史がつながっていたというすばらしさも私たちは忘れてはいけないうと思ひます。

ほんの身近なことをいいますと、私の隣の岡山は備前岡山に32万5000石と先程おし上げました。その銀行で私は仕事をしておりました。それから北の方に行くと米子という町があります。鳥取藩です。そこに支店を出したことがありました。鳥取の人、つまり米子の人が岡山から来た銀行の支店の連中に何を言ったかという「おう、お前ら、よう来たな。お前ら岡山は池田さんじゃろうが。わしら鳥取も池田じゃぜ」というところから話が始まるのです。鳥取の池田と岡山の池田は兄弟で、お国替えしたりしています。そういう歴史を皆しっかり覚えていてくれて、「池田から来たんだね」という親しみを持ってくれるような風土が日本の地方にあるということはおしごく大事だと思ひます。これが世界へのメッセージにどうつながってくるかという、日本人が歴史の中で生み出してきた自然へのつきあい方の中には世界へのメッセージがたくさんこもっていると思ひます。

もう一つ、これはぜひ伺いたいところなのですが、この高岡では神様や仏様をどのように思っておられるのだろうか。私のところではわりあい真言宗が多いのです。真言宗のお坊さんが法事などで唱える光明真言という一番大事な真言があります。オン アボキャベイロシャノウ マカ

ボダラ マニ ハンドマ ジンバラ ハラバリタヤ ウン。この真言を唱え始めたら、後ろの方からそれに唱和する声がふわっと上がってきます。そのような風土が日本中にあるのか。

私のところは瀬戸内海を渡って四国に行ったら、そこは弘法大師の讃岐の国です。四国八十八箇所をまじめに回っている仲間が何人もいます。例えば1年に4箇所しか行けないとしても、20年かかったら八十八箇所回れるわけですから、そういうことを熱心にやっている人たちがいます。仏様だけではなくて、神様たちも生きています。私たちは瀬戸内の比較的穏やかな風土の中でいつも思うのですが、この瀬戸内の神が、例えば海に宿る神々、川岸の岩に宿る神々、森に宿る神々、あるいは家の中にも神々はいますね。たぶんここでも同じでしょう。かまどにいる神様、入り口にいる神様、そういう人たちの声に耳を傾け、神々のメッセージを受けとめながら生きていた心根が、たぶん今世界に対していろいろなメッセージを出すのではないだろうか。仏様、如来たちのあの限りなく大きな広さや、菩薩たちが私たち人間に注ぐ慈愛の眼差しといったものが、今、世界に出すメッセージはものすごく多いのではないだろうかと倉敷の地にて感じます。

ついこの間、スペインに行きました。うちのものともいろいろな関係がありますから、スペインの話をしします。スペインはエル・グレコの国です。ついでにちょっと余談に入ります。なぜスペインかといいますと、先程、一昨年ここで児島虎次郎展をやったというご紹介がありました。児島虎次郎という人は大原美術館の一番最初のコレクションを選びとった人です。大原孫三郎という変にやんちゃな企業家がいまして、それより1つ年下のものすごくまじめな絵描きでした。このものすごくまじめな絵描きがとても上手に絵を描いて、東京芸大卒業の際の卒業制作は1等賞をとったほどでした。そしてヨーロッパに行き、アントワープというベルギーの町で勉強し、その美術学校をまた首席で卒業して日本に帰ってきます。日本に帰ってきて、ぱったり絵が描けなくなってしまうのです。

わかんと思いますが、ベルギーに行き、向こうの光の中でフランス印象派およびベルギー印象派の手法を100%マスターして首席で卒業する。ついでに言いますが、ベルギーは何かマイナーな感じがしますが、美術の世界ではここはフランドルなのです。ヴァン・アイク兄弟やルーベンスなど、そうそうたる人たちが美術の一つの大きな流れをつくってきた土地柄です。そういう土地柄で伝統に根ざしたヨーロッパ美術を学んで日本に帰ってきた児島虎次郎が、ぱたっと絵を描けなくなる。それは当然なので、その手法で日本のこの空気を描こうと思っても描けはしない。

どうしたかという、そのとき児島は悩みに悩んで中国を勉強します。李朝・高麗を勉強します。それから日本を勉強します。本当にまじめに自分の原点を見つめ直すのです。ここが大事なところ。お配りしたものの右下に屏風祭りがありますが、後ろに何か絵が描いてあります。これはなんと油絵の画家であった児島虎次郎が描いた屏風です。ヨーロッパから帰ってきて、ものが描けなくなって、一生懸命日本を勉強した末に描いた屏風です。渾身の力を込めて描いています。美術の関係の方もここにおいででしょうが、洋画家、いわゆる油絵の画家が日本画を手すさびにやることはありますが、これはそんなものではありません。渾身の力を込めて描いています。こういうことをして、自分の原点をつかみ直し、そしてヨーロッパに行きます。

2度目にヨーロッパに行ったときには、1度目とはかなりヨーロッパを見る眼差しが違います。違うということ、今度はこのパンフレットを見てください。ただの宣伝のために持ってきたのではなく、もちろんそれもあるのですが(笑)。右下の建物の絵が描いてあるところに何か丸っぽいのがあります。アマン・ジャンという人の描いた「髪」という絵です。最初にヨーロッパに行ったときには、児島はうれしくてしょうがなく、ヨーロッパのことを一生懸命勉強して、勉

強専らだったものですから、ヨーロッパのものは何でもすばらしいと思って、この絵を買ってきます。きれいな絵ですが、なんとも甘ったるいとも思えます。そうでもないですか。非常にいい絵ですが、それだけ。これではとても美術館にはなりません。

日本でいろいろ悩み苦しんで自分の原点を再確認して、2度目に行ったときに、そこにかかげたゴーギャンとかロートレックとか、こういうものを選び始めます。この絵についてはいろいろ言いますが、この下の方にエル・グレコの「受胎告知」があります。これがこの間スペインに行ったこととつながってくるのです。児島はただ一つの古典作品として、このエル・グレコを選びます。エル・グレコのどこに共感したのか。

エル・グレコが活躍した町は、トレドというマドリッドから南へ車で2時間ぐらい行ったところにある城塞都市です。小高い岩山のような上に町があり、その下を川が流れていまして、周りは平原です。ご承知のとおりスペインはイスラム教とキリスト教がぶつかる場所でした。そういうところに行ったということで、皆さんそんなことかとお感じかもしれませんが、まさにそうなのです。北アフリカを伝わってきたイスラム文明がイベリア半島に入りスペインに入ってくる。その遺跡がアルハンブラ、ご承知ですね。まさにイスラム文明そのものです。それで、ピレネー山脈を越えて入ってきたヨーロッパ文明とまさにここでぶつかるという場所です。このトレドという町はイスラムに占領され、カトリックが奪い返し、またイスラムに占領されたという歴史を持っていた町です。

そういう町にエル・グレコ。「グレコ」はいわゆるグレコローマンのグレコで、「ギリシャ人」という名前と呼ばれていた人。本名はドメニコス・テオトコプーロスといいます。その「ギリシャ人」と呼ばれたドメニコス・テオトコプーロスが活躍したのが、まさにイスラムとカトリックがぶつかりあっていたスペインの中部にあるトレドという町だったのです。

ヨーロッパでいろいろなことを勉強をして、すばらしいと思って日本に帰ってみたら、実はそれでは飽き足らなくて、あれではだめだということで、もう一度日本を勉強しなおし、中国を勉強しなおし、最終的に児島は、こういう屏風を描いたり、いろいろなことをした集大成として1枚の絵を描きます。朝鮮半島の民族衣装を着た少女の絵です。チマチョゴリの少女が花咲き乱れる庭にいて、ちょっと恥じらいを含んで花を折ろうとしている、あるいは折っていないかもしれない。ちょっと手をさしのべて、片一方の手は頬に当てています。眼差しはちょっとはずしています。ある意味で東洋的な恥じらいを込めた絵を西洋的な印象派の手法で描いて、これをパリのサロンに送ります。そしてこれが入選し、児島虎次郎はパリのサロンの日本人最初の正会員になるのです。

児島としてみれば、これは一つの挑戦だったのだらうと思います。自分の東洋人の心、日本人の心を表現したものを描いて送って、これが通用するかどうか。これが通用したということを見極めて、2度目にパリに行くのです。そして旅をしたのがスペインだった。そのスペインのトレドという町に、異邦の国ギリシャからトレドまで、スペインのそういう文明のるつぼまでやってきて、ようやく自分なりの世界をつくり出したエル・グレコに対して、ヨーロッパにいる異邦人である児島が非常に深い共感を持ったのが理解できると思います。そういう共感がいろいろな意味で私たちの美術館の基礎になっているから、今日こういうお話ができるのです。このスペインの話はもう一度あとから出てくるかもしれません。

もとに戻りますが、そういうスペインにこの間行ったときに、何を見たかという、スペインの南部にコルドバという町があります。それこそキリスト教とイスラム教が取り合いをしていた

町です。そのコルドバの町にメスキータという観光名所があります。イスラムは回教寺院です。そこでイスラム教徒モスレムの皆さんはまじめにお祈りをしますから、そのためのスペースとして2階建てか3階建てくらいの高さのわりに平たい広い平屋のスペースがとられています。そのイスラム寺院のほぼ真ん中に、この平たい屋根を突き破って、豪壮なゴシックの教会が建てられたのです。イスラム教とキリスト教とはそういう関係なのです。もちろん、そこを見ている今のスペインはカトリックです。しかもカトリックの原理主義に近い国ですから、「すばらしい」と言って、皆、拍手喝采するわけです。もちろんここだけではありません。エルサレムにもそういうところはたくさんあることはご存じだと思います。キリスト教の教会を壊して、そのあとにユダヤ教の教会ができています。そのあとにそれをまた壊して、イスラムの教会ができています。

そのような回教寺院の天井を突き破って空高くゴシックの建築を造り上げようというメンタリティを持ったところに対して、先程ちょっと言いました私たちの持っている神様や仏様に対する感じ方というのは何かすごいメッセージなのではないか。これを、私たちは、少なくとも私は倉敷では感じます。高岡の皆さんも感じているだろうかというのは、ぜひ教えていただきたいのです。

東京に行くと、違うのです。東大寺の展覧会をシカゴでやったことがありました。そのとき東大寺のお坊さんたちは一緒に仏像に付いて行って、その前で毎朝勤行をやっていました。当然の話です。それを見て、CNNだったかABCのレポーターが、こういうことで日本仏教の仏様の展覧会をやっている。それに僧侶が付いてきて毎朝勤行をやっている。こういった仏像たちが今も本当にまじめな宗教の対象であるということは信じられないかもしれないが、現実にそうなのだということを彼らは言っていました。それをある日本の民放のニュースで聞いて仰天したのです。東京発信のニュースでしたが、最後の「現実はそのようなのです」というところが抜けているのです。「こういう仏像がまじめな宗教の対象であるなどと信じられないと彼らは言っている」というレポートになっていました。東京の人の受けとり方はたぶんそうでしょう。私たちの受けとり方は、お坊さんたちがそこで本当にまじめに勤行している、少なくとも倉敷にいる私には自然な姿に見えます。そのように日本の地方各地では、神様に対する心や仏様に対する心だけではなく、美しいものに対する心情が生きているのではないだろうか。これが世界に対する非常に大きなメッセージなのではないかと、今、倉敷で感じているということ、残りの時間を使って少し言わせていただきたいと思います。

地方の論理と主張を少しだけ

—地方が再生してこそ、日本は健全な国になる—

その前に、見回してみると経済人の方も若干おいでのようですから、そのようないろいろなメッセージを持った地方を、今、日本はつぶそうとしているのではないかというものすごい危惧の念を私は持っています。この辺は巖山先生や滝沢先生にあとからいろいろとご意見をたまわりたいところです。日本の国の今の状況を見ていると、どうも本社ばかりものすごくきれいになって工場がさびついている会社を思い出してしかたがないのです。日本の国債の格付けが下がったということで、ひところ大騒ぎしたことがありました。総理大臣や財務大臣はあんなことはまちがいだと言いましたが、地方で見ていると、まちがっていない感じがします。私は以前銀行に勤めていましたが、どんな会社でも、本社ビルをびかびかに磨き上げて工場がさびついているような会社があったら、その会社からはすぐに融資は引き上げます。間もなくつぶれるだろうと。日本

はそんなふうになっているのではないかという気がしてならないのです。

私の地元ですが、瀬戸大橋などと言うと、全国各地でものすごい反発を食らうだろうと思うのですが、首都の論理はすごく変なのです。例えば、あれを検討している委員会がありまして、2～3日中に結論が出るようですが、私が非常に尊敬している評論家の委員の方がこういうことを言われました。「東京生まれ東京育ちの自分には、地方の知事や市長の言っていることはとても理解できない」と。私たち地方の民の目から言うと「知事や市長の言うことが理解できないから、地方のことを考えるこの委員会の委員に私はふさわしくない」とおっしゃるのがあたりまえだと思うのですが、どうも逆なのです。東京生まれ東京育ちの自分たちに理解できないことを言う知事や市長の言うことは無視してよろしいというように聞こえます。これはとても困るのです。

瀬戸内海に3本橋が架かっていることを言うと、たぶん猛反発を食らうと思いきや言いますが、地方の知事さんで3本橋を架けてくださいなどとお願ひに行った人はだれ1人いません。もちろん「自分のところに架けてください」とは言いますよ（笑）。例えば、車を買うときのことを考えてください。トヨタ、日産、ホンダ、皆セールスマンがやってきて、自分の車が一番いいということを生懸命言いますね。だからといって、3台全部買ってしまったら家は破産します。うちの知事も確かに行きました。そして3本の中で真ん中の瀬戸大橋のルートが一番いいということを生懸命宣伝しました。広島知事さんは向こうがいいと言うし、兵庫県の知事さんはこちらがいいと言いますが、3本全部造ってしまったのは岡山県知事の責任だというのはどうもよくわからない。同情を求めているわけではありません。いろいろなところで変なロジックが、今、通ろうとしているような気がします。

例えば、地方に道はもう出来上がっている。あとはヒグマの邪魔をしないように道を造らない方がよろしい。あとは皆、東京だけに造りなさいというのが市場原理で道を造るというロジックです。本当にそれでいいのでしょうか。もちろん道だけの問題ではありません。

今、日本中で地方がしっかり目覚めていかないと、例えば地方の自立のために税財源を地方に移譲しようなどという話があります。こういう話を聞きに来たつもりではないという方がおられるかもしれませんので、少しだけ言います。税財源を地方に移譲しようと言われて、地方の民は「ああ、そうかな」とだまされてはいけません。そのときに言われるのは受益と負担のバランスということになります。どういうことかと言うと、東京の人はたくさん税金を払っているから東京ではしっかりサービスをやりましょう。鳥取県や島根県な、地方の人はあまり税金を払っていないから放っておいてよろしいと。これが受益と負担のバランスという論理です。みんな東京に集めていきましょうと。そんなものにうかうか乗ってはいけません。

よく東京の人は言います。自分たちがたくさん税金を払っているのがみんな地方に使われている、地方ばかり優遇されていると。結局そうならないことは日本中を見たら明らかなのですが、それはともかくとして、私たち地方の民の目から見ればどういうことになっているかと言うと、確かに東京の租税負担率は高いです。けれども、これは東京の人がたくさん税金を払っているというよりも、税金をたくさん払う人がみんな東京に集められているからと私たちには見えません。高岡市立の小学校は、まだ小学生ですから税金を払っていません。生活をし、教育を受け、この地で警察や消防に守られ成長して、これが大企業の社長になったらみんな東京へ出てしまいます。あるいは有名タレントや売れっ子作家になったら、みんな東京に、行ってしまおうのではなく行かざるをえない仕組みを東京がつくってしまっている。そういう仕組みをつくってしまったうえで、東京都民はたくさん税金を払っているのだから、みんな東京で一生懸命道を造れ、何も

造れ。国立博物館も国立劇場もみんな東京に造りなさいと。国立劇場は東京にいくつありますか。高岡にいくつありますか。たぶん1つもないですね。もしかしてあったらごめんなさい。国立博物館は北陸にいったいくつありますか。もしかしたらないかもしれませんが。何でもかんでも全部東京に造りなさいという話に持っていきこうというのが、受益と負担のバランスの話だと考えてください。地方はだまされてはいけません。今日は経済講演会ではないですから、これ以上あまり言いませんが、「地方の論理と主張を少しだけ」というのはそういうことです。

本社だけがよくなる国になるのは非常にまずいというのは、1980年代のことを思い出してください。1980年代に、日本は「ジャパン・アズ・ナンバーワン」などと言って大威張りに威張っていました。アメリカを追い越したとか言っていたのです。確かにそういう時期はありました。アメリカはそのころ非常に国力が衰え、世界最大の債務国になりました。どうやって再生してきたかという、地方をもものすごく強くしたのです。あのころ高岡に来たかどうか、岡山にはいくつかの州から投資を誘致する使節団が来ました。そして自分の州に投資してくださいと盛んにPRしていきました。そのときにいろいろなデータを持ってくるのです。自分の地元には、例えばこんな難しい数学を理解できるPh.D（博士号）を持っている人が3万人もいるからここで新規の投資をやったらいいなどと、いろいろなことを言ってきます。その結果アメリカではどういうことが起こったかという、地方に産業クラスターというのができました。

クラスターというのはブドウの房のようなものですが、シリコンバレーはご存じですね。そこだけではなく、例えばテキサス州オースティンやアリゾナ州フェニックス。ジョージア州アトランタはご存じですね。これらはその以前からかなり大きな産業集積がありました。全国いろいろなところにそういう集積をつくったのです。その中の1つにロチェスターというニューヨーク州の人口20万の小さな町があります。この町とあまり変わらないのです。そこにゼロックスの本社、イーストマン・コダックの本社、コンタクトレンズをしている方がおられたら、ポシユロムをお使いの方がおいでもかもしれませんが、その本社があります。人口20万の町なのですが、町の周りを自動車道路が2つ巻いています。その町の真ん中に住んでいる人と話をしましたが、北に行ったらすぐ五大湖がありますから、湖畔のすばらしい環境の自分のうちまで車で20分通える。「20分は普通なのだけれど、朝のラッシュアワーはそうはいかない」と言うので、「では何分？」と言ったら、「25分」と（笑）。地方都市はそうあるべきなのです。そこに産業集積ができています。クラスターができています。

決め手は3つあると言いました。1つは教育。子どもたちの教育に非常に熱心。もう1つは美術館。手前みそで言うわけではありませんが、すばらしい美術館を造って、大人たちが楽しめる時間をつくった。3つ目はコンサートホール。これはイーストマン・ミュージックスクールというのがありまして、そこでとてもいいがあると。もう1つ、あえていえば大学。ロチェスター大学などというのは、今から3か月前まではたぶんどなたも聞いたことがなかったでしょう。けれども、そこそこの大学でして、ノーベル賞をもらった小柴さんが留学していた大学です。そういう大学がニューヨークやワシントンではなくて、そういう田舎町にあるのです。いわば文化的な仕組みをつくることによって、そこにいろいろな人が住んでくれて、そこから1つの産業集積が出てきたということをロチェスターの町の人が言っていました。

全国をそのようなかたちでよみがえらせてきたから、80年代につぶれかけていたアメリカは今、ものすごくよみがえっているわけです。これは今日の「文化の世紀」のメッセージとはちょっと違いますが、地方は絶対つぶしてはいけないと思うし、そういう面でも地方どうしは手を組

んでいかなければいけない。本当に東京の人は全然わかっていないですし、まちがいだらけをやっている気がします。いずれにしても一緒に再生して、日本を健全な国にしていこうという中で、地方から世界に一生懸命いろいろなメッセージが出されているということを最後に申し上げます。

大原美術館が訴えたいこと

—良質の世界と日本が出会うところ—

ここは今まで申し上げてきたことと全部関係してくるのですが、私たちの美術館が一番大事にしているのは、世界と触れ合う中で磨かれた日本人の眼差しだということをご理解いただきたいと思います。そのために、この一番上に丸い絵を2つ付けたのです。最初に申し上げた通り、世界の美術品、いわゆる泰西名画の一番メジャーなものが置いてある部屋から丸窓の外を見ていただくと、そこには日本の原風景があるのです。原風景というのはただそこにあるというあるものではないのです。私たちが一生懸命保存しているものなのです。そうしないと残りません。そして私たちは私たちの町の歴史の中で築き上げられてきた、この前にある商人の家の瓦を1枚1枚置いてきた江戸時代の職人の心根を大事にしたいと思っています。そういうものを大事にしている気持ちを表すためにこそ屏風祭りをやっているとお考えいただきたいと思います。私たちが一番大事にしているのは日本人の心根であると。

先程、児島虎次郎のことをわざわざ申し上げたのはそういうことなのです。彼はヨーロッパに行き非常に優秀な学生でした。ヨーロッパのことをどんどん吸収して勉強して帰ってきました。帰ってきて何年かのブランクの中に、日本人の心根を取り戻し、私たちの眼差しを取り戻して、2度目にヨーロッパに行き、全部がそうではありませんが、このパンフレットにある絵を選びとってきています。例えば、右上にあるモネを見ていただきたいと思います。虎次郎は何度もジベルニーというところにあるモネの家を訪ねています。当時たぶん汽車と馬車を乗り継いで行ったのだと思います。行ってくるのは一日仕事でしょう。美しい庭があります。花が大好きですから庭に花を育てています。児島虎次郎はモネと友達になるために、わざわざ日本からボタンの苗を取り寄せて、それを大事に持ってモネの家に行ったということが記録に残っています。そうやってモネと友達になって、友達と言っても向こうは大家ですし、年の差もあるわけですが、「実はモネさん、日本にあなたの絵を1つ持って帰りたいのです」と言ったところ、モネは「日本に持っていかせるものは今はない。ついては1か月後にきなさい」と言うのです。それで1か月後に行ってみたら、何点か用意してあって、その中の1つがこれだったのです。

これをご覧になりますと、スイレンの池があります。プリントではわかりにくいですが、水と花以外何もないのです。水の空気もしっとり湿って、少なくとも私の育った瀬戸内の風土にはびったりした感じの空気がここに漂っています。これ以外にもいろいろなスイレンがあります。例えば、ブリジストンにあるスイレンは柳がたれています。あるいは日本風の太鼓橋が架かっているものもあるし、小舟があるものもあります。うちは何もない。ただ空気だけしかない。あえて空気だけしかないこれを選びとった。モネ自身もこれがすごく気に入っていて「おお、これを選んだか」と言ってくれたし、日本テレビのモネの取材で、前、モネのお孫さんのところに行ったときに、モネ自身は倉敷に行った絵が大好きだったということを言っていたという話もあります。そういうものを選びとって帰ってきた。もしも倉敷においでになることがあって、世界の美術館をご覧になることがあったら、ほかのスイレンと見比べていただいたらいいと思います。例えば、

アメリカの美術館にあるスイレンはもっと晴れています。もっと陽光さんさんとした南フランスの光の中で、真っ青な空の下にあるようなスイレンです。こんなにふわっと、湿った空気が押し寄せてくるようなスイレンは、アメリカの美術館にはあまりないです。それぞれ自分の眼差して選びとっているのです。カリフォルニアの太陽で育った人たちはそういうモネを選んでいる。私たちはこういうのを選びとっている。

日本の絵は、ものすごく自然と響き合うのです。こんなことを申し上げると自慢話のように聞こえたらいけないのですが、今、倉敷の私の家はかなり我慢して意地を張って、200年前に建てられた日本家屋に住んでいます。これは相当大変です。ここだったら、たぶん寒くて住めないでしょう。瀬戸内だからなんとか住める。けれども、いいのは、そういう家ですから障子があって、その外は外です。だから寒いのですが、今はちょうど障子に紅葉の色が映えてとても美しいのです。紅葉の色が映えないときでも、床の間に何か絵を飾っていたら、あるとき僕はちょっと風邪を引いて1日微熱にうかされながら、江戸時代の文人が描いた宇治の風景を掛けておいたことがありました。朝の光で見るととき、昼間、夕方、日が傾いて斜めから赤っぽい光が差してきたときに、床の間にあるこの絵の風景がだんだんと変わってくるのです。これが日本の美術、日本のものです。

平山郁夫先生が私たちのふるさとの山の風景を描かれた絵があります。緑の山です。「吉備路緑映」という題です。先生が来られて「この絵の具は緑青です」とおっしゃいました。緑青は酸化銅ですから「酸化が進んだら色が変わりますね」と言ったら、先生は平気な顔をして「あたりまえです、変わります。それが日本の絵です」とおっしゃいました。ある意味これはすごく感動したのです。

例えばここにあるエル・グレコ、私が大学のころですから今から30年ぐらい前に修復しました。そうしたら表面の酸化したものの下から本当にきれいな色が出てきて感動しました。こういうかたちに修復するのが西洋の絵なのです。今、私のところの館長をしている高階秀爾先生にそういう話をしたら、こんなことを言っていました。「西洋というのはそうなんだ。絵は出来上がったときが一番いいんだ」と。だから、出来上がったときの状態に戻すのが修復で、その結果、仕上がったときのそのままの姿に戻ったら「ああ、すばらしい」ということになる。これが西洋の文明文化だと。高階先生は大変な愛妻家で、西洋の夫婦もそうだね、だけど日本は違うよねと。結婚したときが一番いいのですよ（笑）。だから西洋の話は結婚したところで終わってしまうわけです。そのときの状態を保つために一生懸命 I Love you とかやっているわけです。私たちがいろいろなことに感じている年輪の意味合いと彼らが感じている仕上がったときが一番きれいという考え方とはかなり違うと思います。

それはそれとして、そういう自然や時のうつろいなどを見事に、あるいは障子に当たる光と見事に感応しあうのが日本の美術だとしたら、この「睡蓮」を見てください。たぶん西洋人の描いた美術品の中で、障子に映る陽の光のうつろいに一番美しく反応してくれる絵ではないかと私は思います。そういうものだから児島の心にすごくアピールしたのではないか。この次のゴーギャンももっと恐ろしい絵をたくさん描いています。けれども、この恥じらいというのは、先程ちょっと触れました日本で最後に描いてパリに送ったチマチョゴリの少女の恥じらいととても通じ合うところがあるという気がします。ついでに言うと、その絵を送って入選して、ちょっと自信を取り戻してヨーロッパに行って、それからこれを見ているから、このまねをして描いたのではなくて、自分の描いた絵とよく似たものを選んできたのかもしれない。

この「受胎告知」も本当に不思議な「受胎告知」なのです。この中に美術の専門家の方も何人かおいででしょうから、あまり口幅ったいことを言うと、あほかと言われるかもしれませんが、右上にガブリエルの天使がいて、ここにマリア様がいる受胎告知というのはあまり見たことがありません。マニエリスムなどの時代の時代様式はそうだとしたらそのとおりなのですが。そもそも受胎告知とは、ガブリエル天使がマリア様のところに降りてきて、あなたはキリストさんを身ごもったから大事にうまく育ててください。頑張ってくださいにきています。

大体どうなっているかという、例えば絵がこうあると、その右のこの辺にマリアさんがいて、左の方にガブリエル天使がいて、こういうふうに「あなた、頑張ってください」ということを言っている。これは西洋ですからラテン語で言っていることになっていますが、アベマリア グラチア プレナ・・・(Ave Maria, gratia plena)、シューベルトなどのアベマリアのあのせりふです。あたりまえですがABCはこういうふうに、左から右に見ますから、こちら(左)からメッセージが出ます。中にはすごく変なものがあって、それに対してマリアさんは答えるのです。「我は主のはしためなり」などと。マリアさんはこちら(右)からこちらに言っているわけですからアルファベットで書いたら逆になってしまう(笑)。困ってどうしたかという、上から下に書いたのです。そういうのはあります。これはどういうのかという、神様に答えているのだから神様の方から読めるように書いたのです(笑)。とにかく、こういうふうにメッセージが流れるというのがほとんど全部です。そして、マリア様のところには家があったり、ガブリエル天使がいるところは庭だったり花や塀があったりします。

これを見ていただくと全然そうではない。こちらからこちら(右上から左下)へというのは日本の世界でしょう。この辺に雁がいて向こうから帰ってくるとか。こちらに虎がいて向こうに竜がいるとか。こうメッセージが流れている。これはあたりまえなので、いろはにほへとはこう右から左ですから。こういう姿の受胎告知というのは本当に珍しいのですが、この時代にはあるのです。あるいは、エル・グレコがたくさんそういうものを描いています。そういうことでも見島は、これはなんとか親しめると思ったのかもしれませんが。あるいは、こういうふうに岩も家も何もなく、その後ろに雲が巻いているなどというのは、あまり西洋ほくないかもしれませんが。実はそういうことを考えたのはそんなに昔のことではありません。

ドイツにフォルクガング・ミュージアムというのがあります。個人コレクションです。この展覧会を日本でやったことがあり見に行きました。並んでいる絵はフランスの絵や、印象派か何かなのですが、すごくドイツではないかと感じたことがありました。ちょっと待てよ、これがドイツなら、うちは日本かなと思ったのが今から7~8年前ですから、それほど昔のことではないです。帰って見てみたら確かにそうだったというのが、例えば、このモジリアニもそうです。これはジャンヌ・エビュテルヌというモジリアニの最後の恋人の肖像です。これから2年後にモジリアニは死にますが、死んだ次の日にこの人は後追い自殺をします。そういう人の絵なのです。このおなかの中にはモジリアニの赤ちゃんがいます。この赤ちゃんは育ったようです。女の子だったようですが。

モジリアニは同じところにジャンヌ・エビュテルヌを何枚も描いています。例えば、カリフォルニアにノートン・サイモンという倉敷の大原と同じような個人コレクションを中心にした美術館があります。ここに同じ時期に同じジャンヌ・エビュテルヌを描いたモジリアニの絵があります。どういう絵かという、こんなにでれっと黄色いセーターは着ていません。黒いベストに赤いセーターで、めりはりがきちんとしています。それから、この絵のこの辺にちょっと黄色い物が見

えているのがおわかりですか。これはいすの背であるらしいのですが、何かわからないでしょう。ノートン・サイモンの絵はちゃんといすが描いてあります。それから、後ろにドアなどもきちんと描いてあります。ノートン・サイモンが選んだものは隅々まで説明されています。

これは僕がフォルクガングのコレクションで日本ということに気がつく前に選んでいたのですが、私たちが選んだのは、後ろには何も無い、着物も黄色がでれっとしたこういう雰囲気のもの。たぶん今、ノートン・サイモンのものとこれとが2つ並んでいたとして、アメリカ人のノートンさんはこれを選ぶだろうし、私はこちらを選ぶだろうと。そういうところが日本人の眼差しなのです。私たちの眼差しはこうなのだと言ってもらえることは、日本が、日本の文化が、日本の文化的な風土が、私たちの心根が世界に理解されること。私たちの心根を世界に発信すること。世界の人たちのことを私たちが理解すること。これが、これからの世界にもものすごく大事な1つのポイントになってくるような気がしています。

世界の文化をお互いに理解しようというのは、私たちが世界を理解しようとすると同じくらい私たちのことを世界に理解してもらおう努力が必要だと思います。そういうことをみんながやって、初めてこれからの60億か100億の人口をこの地球上で養わなくてはならないこの世界が平和でしかも居心地のよい世界でありうると。お互いに、私たちはこう思っている、こう感じている、こういうことを尊いと思っている、こういうことを疎ましいと思っていると。砂漠の民の感じていること、森の民の感じていること、それぞれ違います。瀬戸内に育った私の感じ方だけを言っただけではいけないのかもしれませんが、私たちはこういうものを美しいと思っている、好ましいと思っているということを世界に対して主張し、あるいは知ってもらうように努力することはものすごく大事なことだと思います。そんなことあまり大したことではないと思わないでください。

例えば、森の民と言いましたが、ゲルマンの森の中で狼と共存しながら育った民が、今、自動車は全部リサイクルできるようなものを作ろうと一生懸命努力しています。そんな努力をしたおかげで、ベンツなどという車はつまらなくなったと言うモーターキチがいがあります。確かにそうかもしれませんが、森の民はそういうことを考えている。あるいは、こんなことを言ったらものすごく怒る人がおられるかもしれませんが、草原からバッファローを殺戮しつくすことで反映を築いた民が、今、どういうメッセージを世界に出してくれているのだろうかというのはとても心配です。もちろん、アスペンがあることは忘れたわけではありませんし、1つの大変な救いだと思います。その中で、私たちは世界にわかってもらえるどういうメッセージを出せるのか。もちろん如来菩薩を語ることも1つのメッセージでしょうし、日本の自然の隅々に住んでいる神々の声を語ることもメッセージでしょう。私たちは里山をどのように扱ってきたか。

皆さんご存じだろうと思います。山は手入れをするからこそいいのです。耳学問ですが、里山は極相林までいってしまったら、酸素の生産能力は落ちるようです。木も生存競争をしていますから、あるストレスの下で一生懸命生存競争をしているときに、一番いい酸素をたくさん出している。私たちは里山が極相林までいかに下草を刈ってやっているということで、今までそういう山を保ってきたようです。今は少しあやしくなっていますが……。それは山の神々の語りかける声に私たちが耳を傾けてきたからです。そういう神々の声をしっかりと私たちが受けとりながらやっていくことを世界に対して説明することも大事なわけけれども、それがわかっていかなかったら、私たちはこういうものを選ぶ感性を持っていると。

そしてこの横には日本の絵があります。ついでに言うと、ここに黒い土瓶があります。これは

あるとき大原孫三郎の友達が彼のところに持ってきて、これを見て孫三郎がびっくりしたというのが陶器の世界とのつきあいの始まりでした。私たちはこういうものを作り出しながら選んでいる。そういうメッセージを発している美術館が、倉敷というとても歴史を大事にしている町であるそのことを、1つのメッセージとして世界に訴えたいと思っていますし、倉敷はそういうことを世界に訴えていきます。東京はたぶんそんなことは訴えないでしょう。どこどこからCO₂の排出権を何百万ドルか買いますというメッセージを出すでしょう。けれども、東京だけではなく、倉敷も京都も奈良も金沢も富山も高岡も、そういう日本の心、日本文化の心を伝えるメッセージを出していくことがとても大事なのだらうと思いますので、そういう意味で私たち倉敷のメッセージも受けとっていただきたい。そして私もこの高岡のメッセージをしっかり受けとって帰りたいと思うということをお願いしたらかなり時間が超過してしまいました。

質問を受ける時間を持ちなさいというご命令でしたので、もしおありでしたらお答えしたいと思います。どうも長時間ありがとうございました。

以下は講演に先立っての水島副学長による挨拶と、滝沢教授による大原氏の紹介

(水島) 皆さん、こんばんは。本学副学長、大学開放センター長の水島でございます。本来なら蠟山学長がご挨拶を申し上げなければならないところですが、現在入院をいたしておりますので、代わってご挨拶をいたします。

本日は、地域とともに歩む高岡短期大学開放センターの事業として毎年行っております特別公開講演会に多数の皆様においでいただきまして、まことにありがとうございます。今年は皆様よくご存じの倉敷大原美術館の大原謙一郎理事長をお迎えし、「地方の視点で『文化の世紀』を考える」、副題として「倉敷から高岡へのメッセージ」というタイトルでご講演いただきます。

大原美術館の所在地、倉敷市は、岡山市につぐ県内第二の都市で、ダイナミックな産業都市、また多数の観光客を集める文化都市としても知られております。この点は富山県第二の都市であり、また前田利長侯以来の歴史を有している伝統の街、またアルミなど県内一の産業都市、産業文化都市である高岡市と相通ずるところがあると思います。本日は「倉敷から高岡へのメッセージ」という副題のご講演ですが、どのような内容が大変期待しているところです。

大原先生につきましてはこのあと本学の滝沢教授からご紹介がありますが、芸術系の学科とビジネス系の学科という構成の本学としまして、実業界で活躍されながら日本の代表的な美術館を動かし、さらに倉敷芸術科学大学の客員教授もされておられる大原先生のお話を伺えるということは、大変貴重な意義深い機会であると思っております。大原先生にはどうぞよろしくお願いを申し上げます。

(滝沢) 皆さん、こんばんは。講師の大原先生について紹介させていただきます。

先生は当短大の蠟山学長とは東大経済学部における卒業演習・小宮隆太郎ゼミの同期生で、以来の友人です。学長はこちらに来られる前は阪大が長かったのですが、阪大時代にはクラレの副社長、また中国銀行副頭取等として関西経済界の中核的な存在としての大原先生と交遊を深め合ったようです。クラレから中国銀行副頭取、さらには岡山経済同友会代表幹事を経まして、現在は倉敷を拠点とされ、大原美術館や倉敷中央病院の理事長、また倉敷商工会議所の会頭として活躍されています。岡山県教育委員会委員長、あるいは倉敷芸術科学大学客員教授として教育界にも関係しておられます。

先生は、倉敷紡績、クラレ、中国銀行を創業された大原家の当主です。祖父大原孫三郎氏は我々の世代の人間にとっては企業人の鏡と思った人間です。キリスト教的人道主義を通じて社会事業家としても知られているわけです。大原美術館、倉敷中央病院、大原社会問題研究所、大原農業研究所、倉敷労働科学研究所等の文化施設をも創設し、地域のため、また日本文化のために貢献しました。先生のお父上の総一郎氏も戦後の経済復興と文化振興に財界トップとして大きな貢献をされました。経済同友会の代表幹事であられたり、国民生活審議会の会長であったりと、やはり事業を超えて、自分の企業を超えて、さまざまな国の経済振興・文化振興に尽くされました。

大原美術館は、地域の画学生であった児島虎次郎に任せて、ヨーロッパで集めさせた西洋絵画が創設のきっかけのようです。エル・グレコの「受胎告知」は17世紀の作品、ルノワールの「泉による女」は19世紀の作品ですが、そのほかセザンヌ、ブラック、ピカソなどの作品群は大原コレクションとして知られております。その一部は一昨年、高岡の高岡市美術館におきましても、児島虎次郎の記念展ということで大原美術館の作品が持ってこられました。また美術館周辺の都市景観は美観地区として保全されています。旧倉敷紡績の本社工場はれんが造りですが、内部を変えて、ホテルに変えた倉敷アイビスクエアとして、女学生等の観光名所になっています。私も行ったことがあります、非常にいいところです。

ところで私ですが、大学教養学部における同級生として、安保闘争時代の議論を思い出します。私が授業放棄のクラス決議をして国会デモへ行こうと主張いたしますと、氏は「それはクラスメンバー皆の自由意志に任せるべきだ」と強く私をたしなめました。しかし、少し行って振り返ってみると、彼はデモに参加していました。私は氏の人柄に打たれたものです。樺美智子さんが亡くなった1960年6月15日の頃だったと思います。先生は大学を終えてから、米国エール大学でマスター、ドクターと5年間を学び、その後帰国して父上の事業を継ぐ道を選びました。まず大阪、ついで岡山、倉敷と活動の拠点を移しながら、常に地域の視点、地方の視点、文化保全の視点から、中央への提言と発信を続けておられます。私どもはたびたび日本経済新聞等の論壇で大原さんの論文を拝見しておりました。企業人・文化人に加えて、社会事業家としての大原家の伝統を受け継いでいるように思います。

本日は企業人かつ文化人・地域人としての立場から、地方発の論理と主張をお話しいただくわけです。倉敷の文化保全・育成における苦労話や経験を、文化都市高岡の発展のためにしっかり学びたいと思います。ご静聴お願いいたします。

では先生、よろしく申し上げます。